

和紙の匠

たくみ



平野滋子さんひらのしげこ (根雨)
全国各地で教室などを開き、ちぎり絵の制作、普及に取り組んでいる。平野流和紙ちぎり絵の師範講師。

四季の美しさに心引かれながら思いのまま題材を描き、和紙でひとつの立体的な作品を生むちぎり絵。和紙の匠たくみ、平野流和紙ちぎり絵 平野滋子さんを紹介します。

和紙が作り上げる

芸術「ちぎり絵」

ちぎり絵は、和紙の持つ風情を自分の指先でちぎり、のりをつけて表現台となる色紙や短冊などに貼りつけていく手法で、和紙が作り上げる芸術品です。

画題は、移り行く四季の山野の美しい景色、草花、動物、人物、陶器などさまざま。「きれいなものはきれいと感じられる心が大切です」と滋子さんは言われます。

立体的な重ね貼り

平野流の特徴

平野流ちぎり絵は、家元の故平野富美江さんが試行錯誤の末にたどりついた立体的なちぎり絵。和紙独特の持ち味を生かし、刃物などは使わず、自分の手先の微妙なさばきで、

色鮮やかな和紙をちぎって貼りつける。実物の画題を忠実に表現するため「重ね貼り」をして立体的に表現。どの技法も家元が研究に研究を重ね工夫されました。

画題の形、どこにどんな色が使われているのか。実物に最も近い和紙の色を使う。実物を実物どおりに表現するのが平野流和紙ちぎり絵です。

一つひとつを

忠実に表現する

作品の一つ「アジサイ」にしても花びら一枚一枚、色の濃淡を変えたり、輪郭を毛羽立たせて色調を柔らかく表現。また、葉の色も花より下にはやや濃いもの、上になるほど薄色の紙を使い遠近感を出す。葉脈は繊維のある雲竜紙から繊維だけ取り出して使い、美しい葉に仕上げられています。



画題のイメージに合った和紙を選び貼りつける